

第3種郵便物認可

### 英記者執念の書 「追跡・沖縄の枯れ葉剤」

中村梧郎

青いシートをめくると、潰れたドラム缶があった。赤黒く錆びている。表面に「THE DOW CHEMICAL CO. MI CHIGAN, MIDLAND」の文字があった。私の全身に鳥肌がたつた。まさしく枯れ葉剤の容器である。30年ものあいだ証拠を掴むべく取材を重ねてきたなかで、ついに言い逃れできない証拠が出てきたのだ。2013年の6月。米軍嘉手納基地の返還地に作られた沖縄市のサッカー場でのことであった。私は沖縄市長に対して、愛媛大学に依頼して内容を調べるよう提案した。その結果、「2.4.5-T」や「2.4-D」だった枯れ葉剤成分が検出されたのは言うまでもない。

「追跡・沖縄の枯れ葉剤」



タナム元米軍基地沿いの家で生まれた先天障害のある少女(右)＝2012年5月25日(中村梧郎氏撮影)



を書いたイギリス人記者ジョン・ミッチェルはこの問題にユニークな角度からアプローチしていた。沖縄から帰国したアメリカ兵を探し出し「枯れ葉剤が沖縄に存在し、被曝

## 嘘つく米国 従属する日本

もした」という多くの証言を引き出していたのである。それは4年前から英字紙ジャパン・タイムスにスクープ記事として何度も掲載されてきた。

沖繩にいたアメリカ兵が枯れ葉剤後遺症の補償を受けているという話を最初に報じたのは2007年の共同電であった。60年代に北部演習場で枯れ葉剤を散布し、地元の人々もアメリカ兵本人も浴びたという証言がサンディエゴの復員軍人事務所記録されていたのである。米軍も日本政府もこれを根拠もなく否定し続けた。

帰還兵に特化したSNSサイトを立ち上げた。そこは300人もの兵が結集する場となった。彼らは枯れ葉剤に起因する疾病で苦しんでいた。前立腺がん、白血病、II型糖尿病、呼吸器障害など、それらはベトナム帰還兵に対して米政府が補償してきた病名であった。しかし、米政府は「ベトナム帰還兵」のみを救済すると

いう建前を変えず、沖縄帰還兵らは泣き寝入り状態であった。ベトナム戦争中、沖縄には核兵器から化学兵器・劇毒物にいたる残虐兵器が極秘に保管されていた。いずれも発覚後に米軍が慌てて撤去している。それまで米軍は「存在しない」「知らない」と嘘を言い続けていた。枯れ葉剤の持ち込みもあったのに「文書がない」などと今回も言い逃れをしている。

側は基地汚染に責任を持たない(第4条)とあるからだ。戦争犯罪というべき出来事に、加害の側は必ず事実の捻じ曲げと隠蔽とを重ねる。それは米軍だけでなく慰安婦問題に対する日本政府の対応にも通じている。

一方、例えばベトナム政府の場合は、元米軍基地の汚染を徹底調査し、その結果を米側に突きつけている。汚染者アメリカに浄化責任があるという正論で迫ったのだ。米議会もそれを認め、タナム基地で米国の資金によるダイオキシン浄化作業がいま進行している。タナムの住民の先天異常も顕著であり、ベトナムはその補償も求めている。

沖繩市のサッカー場汚染問題は、周辺住民の健康問題にもつながる。サッカー場を泥まみれで走り回ってきた子どもたちはどうなるのか。ジョン・ミッチェルはそうした懸念も視野に入れつつ、沖縄に

温かく鋭いまなざしを向ける。サッカー場は氷山の一角、米軍基地の75%が集中する沖縄の汚染問題はまた無数に存在するからだ。それどころか日本政府は辺野古に新基地を造ろうとさえしている。集団的自衛権などと言って、アメリカの戦争に日本の若者を差し出そうとする動きがある。今日、サッカー場問題を通して、日米の従属関係にあらためて気づかされるのがこの執念の書である。日本人の人人に読んでほしいと思う。

(フオトジャーナリスト、岐阜大学前教授)